

さっぽろ東本願寺

SAPPORO

No,249
2026 11月号

行事報告 01
雲龍柳 02
今月のことば 03
お寺さんに聞いてみよう 04
門徒のおしごと 05
ひがほんっ子だより 06
法話 尾畑 文正 07,08
無盡蔵 09
近代から現代の教学者 10
すすきの探訪ツアー 11
ダキシメルオモイ 12
おしらせ 13,14

お念仏の声響く 報恩講厳修

報恩講、厳修される

10月23日から28日の日程で札幌別院報恩講が厳修された。

23日の初逮夜は「門徒法要」とし、本院支院の役員総代や婦人会、おつとめ教室受講者を中心とした方々が本堂外陣に列席し、声高らかに正信偈を勤行した。

24日の逮夜は音楽法要とし、札幌別院の崇敬区域より婦人合唱団が集結し、出雲路英淳氏（第9組陽願寺）の指揮のもと華やかな法要が勤められた。

25日からは崇敬区域の僧侶が多数出仕し、伝統的な法要が賑々しく勤められた。25日の夕方にはおつとめ教室の閉講式に引き続き、おつとめ教室修了者を中心に初夜勤行が勤められ、その後『御伝鈔』の上巻が青木悟人列座と高源唯彰列座によって拝読された。

27日の正午には信悟院鍵役により帰敬式が執行され、18名のご門徒が新たに仏弟子としての名乗りを上げた。

27日の結願逮夜及び28日の結願日中は信悟院鍵役を導師に御参修とし勤められ、別院役員の参詣をはじめ、崇敬区域からの参勤法中や団体参拝、准堂衆の加勢、楽人の奏楽等、たくさんの僧侶やご門徒の讃嘆の声が一つとなり盛況のうちに報恩講を円成する事ができた。

報恩講の講師には前半3日間に高名和丸氏（青森県正行寺）、後半3日間に狐野秀存氏（元大谷専修学院学院長）を招き、高名氏には「お念仏のすくい～観無量寿経を通して～」、狐野氏には「『念仏の息』の人」という講題で法話を頂いた。また、狐野氏には従来はビデオ上映にて行っていた帰敬式の事前研修のご法話も担当して頂き、受式者にとってはより充実した帰敬式となった。

支院・関係団体報恩講・社会教化パネル展示

本院の報恩講に先立ち10月1日から14日の間、各支院にて報恩講が厳修された。

さらに大谷婦人会報恩講が9月12日、子ども会が10月17日、ボーイスカウト・ガールスカウト報恩講が10月18日、大谷幼稚園・大谷第二幼稚園・オアシス保育園の報恩講は10月23日に厳修されるなど、関係団体の報恩講も順次勤められた。

また、法要期間中、北海道教区の協力により館内にて社会問題研究部門のパネル展示を行った。27日には10時より北海道教区駐在教導の宇都宮力氏を招き講演を頂いた。


▲結願日中にご出仕される信悟院鍵役


▲教区駐在教導による講演


▲参詣者で埋まった本堂


▲大谷幼稚園報恩講参拝

門徒責役・総代研修会開催報告



8月18日、札幌別院本堂にて「門徒責役・総代研修会」が行われた。この研修会は参加対象を札幌別院の本院及び6支院の責役・総代、札幌別院推進会会員に絞り、始めに正信偈同朋奉讃をお勤めした後、坂田智亮輪番から「真宗寺院の存在意義～今日的時代社会の中で～」の講題で、今時代の別院の使命と別院役員の役割について熱心に講義があった。参加者は真剣に聞き入っている様子であった。その後、場所を移して納涼ビール会が開かれ、別院職員が加わり、意見交換など相互の親睦を深める時間であった。

秋季彼岸会法要勤まる

9月20日～23日の日程で「札幌別院秋季彼岸会法要」が厳修された。

前半の3日間は小川如俊氏（江別市 大恩寺）、中日の23日には酒井智氏（南富良野町 惠光寺）を講師に迎えご法話を頂いた。期間中は延べ１００名ほどの参詣があり、焼香の後、ご法話を聴聞した。

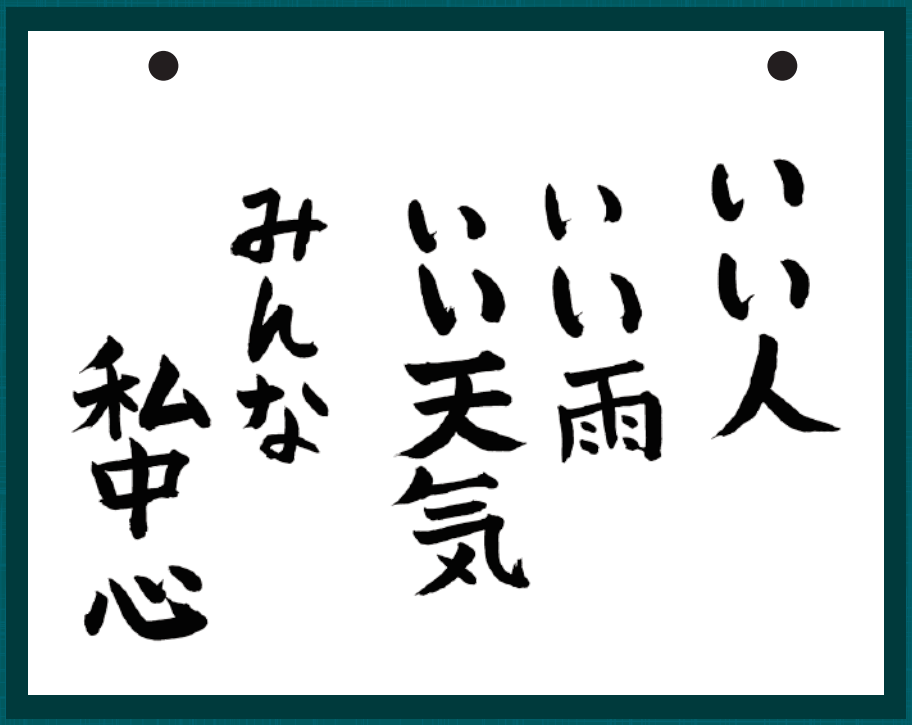
また、24日には本堂にて「札幌別院無量寿堂総経」を厳修した。この法要は昨年までは境内墓地の奥にある無量寿堂に椅子を並べてお勤めしていたが、年々参詣者が増加し屋外での開催が難しくなってきたため今年より本堂にて厳修することとなった。勤行後には坂田智亮輪番の法話があり、参集した約50名の参詣者は亡き人を偲びつつお話に耳を傾け手を合わせていた。

雲龍柳 うんりゅうやなぎ

「冬が来たら冬のことだけ思おう。冬を遠ざけようとしないで、むしろ、すすんで冬のたましいにふれ、冬のいのちにふれよう。」これは坂村真民の言葉である。今年は寒さも一段と加速して冬の訪れが早いようだ▼例年9条の会主催による平和の鐘を毎年9月9日9時9分に撞き、世界平和を希求する。別院の鐘には「天下和順　日月清明　風雨以時　災厲不起　国豊民安　兵戈無用」の銘を刻んでいる。世界中のあらゆる境遇にいる人々にも確かに届く梵鐘は仏の音色である。人びとが平和に希望を持てる社会には、武器も兵隊もいらないのだ。時代の潮流は平和への願いを見失ったのだろうか▼このところＡＩの発達は凄まじい。人間の五感は人間存在に大切な役割を果たしてきたはずだ。危険の察知、情報の収集、心身のバランスなど。しかし、スマートホンが生活の必需品となりつつある今、人間の五感は変調をきたしていると思えるのは私だけであろうか。大気汚染にしてもただ単に気候変動をもたらすだけでなく、同時に人間の心も汚染されていくような気がしている。また、様々な社会の変化・変動にも知らず知らずならされているというか、馴化している感じをもしている▼別院では、周知のごとく10月1日の支院から始まって本院28日の結願日中まで報恩講が賑々しく厳修された。本来一年３６５日報恩講なのであるが、いのちの持つ意味を忘却する我々に、「恭敬讃嘆と慚愧」を知らしめ、信心の溝を浚えて南無阿弥陀仏に立ちかえらせていただく大切な仏事であることは言を俟たない。この世にあって、仏法聴聞の生活は至難の業になっていくのであろうか？噫（ああ）、今年も秋の京都へ足を運んで報恩講に参詣しよう。

（坂）

今月のことば



本願寺派僧侶の「大神信章」のことばです。「今日はいい天気ですね」と声をかけられたら、みなさんはどのような天気を思い浮かべるでしょうか。青空が広がり、暖かく過ごしやすい日をいい天気と感じる人が多いのではないでしょうか。しかし、晴れればかりが続き雨が降らなければ、農家の方は困ってしまうこともあります。晴れたことを喜ぶ人もいれば、雨が降ることを喜ぶ人もいます。考えてみると、「いい天気」という言葉の中には、「私にとって」という心が隠れているのかもしれません。

「いい人」という言葉も同じではないでしょうか。私の話をよく聞いてくれる人、私にやさしくしてくれる人、私の気持ちを分かってくれる人を、私たちは「いい人」と感じます。しかし、私のことを分かってくれない、私の思い通りにならない人を、「わるい人」と決めつけてしまうこともあります。「いい人　いい雨　いい天気　みんな私中心」という言葉は、そんな私たちのものの見方を教えてくれます。

私たち人間は自分中心に物事をとらえてしまうため、自分では公平に見ているつもりでも、実は「私にとってはどうなのか」というモノサシで周りの人や出来事を測っていくのです。その様な私たちの在り方が仏法を聴聞することにより、身勝手な私であったと気づかされていくのではないでしょうか。「いい」「わるい」と決めつける前に「自分の都合だけで見ていないだろうか」とこの言葉を思い出してください。今まで見えていなかった事が、見えてくるかもしれません。

寺本　敬聡



お寺さんに聞いてみよう！

報恩講とは？

Q. お寺で一番重要な行事は報恩講だとお聞きしたのですが、それはどういうものなのですか？

A.

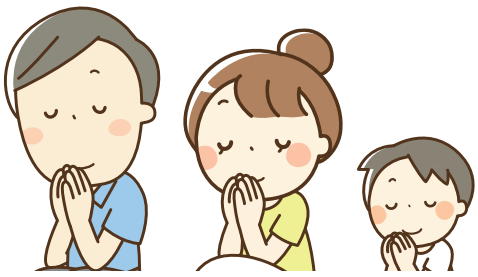
報恩講は宗祖親鸞聖人のご祥月命日（11月28日）におつとめする真宗門徒にとって最も重要な仏事です。一般に知られている仏教行事のお盆やお彼岸に比べて、耳馴染みのない法要だと思われるかもしれませんが、祖師の祥月命日に仏事を営むことは他宗でもあることです。

京都の本山では11月21日から28日までの8日間に渡り行われます。全国の真宗大谷派のお寺でも毎年おつとめしていますが、本山の報恩講にもお参りできるように、時期をずらしておつとめする事が習わしになっています。札幌別院でも10月23日から28日までの日程で行っています。

元々は親鸞聖人が師である法然上人の御命日に上人を偲び、お念仏のお心を確かめるために、お講（勤行・聴聞・語り合いを通して信仰を深める寄り合いの場）を開いた事が原点です。そして、親鸞聖人が入滅された後、残された人々により28日にも念仏相続のお講が勤められ、それがのちの報恩講へと繋がっていきました。今の形に定まる過程で、宗祖の孫にあたる本願寺第3代覚如上人やその子である存覚上人が次第を調えられ、第8代蓮如上人の頃に各地に浸透し、大切な仏事として根付いていったという歴史があります。

報恩講の「恩」とは親鸞聖人がいただかれたお念仏の教えに私たちも遇わせていただき、自らが生きる依り所を教えていただいたご恩を意味します。そのご恩とご苦労に報いずにはおれないという感謝の心でおつとめします。親鸞聖人のあきらかにされたみ教えを受け止め、共にお念仏申す身となっていくことを確かめていくことが大切です。

是非ともお手次寺の報恩講だけでなく、ご本山の報恩講にも足をお運びいただければと思います。



門徒のおしごと
～帆掛鮨　ほかけずし～



帆掛鮨（ほかけずし）
〒064-0917
札幌市中央区南１７条西９丁目１－４０
【T　E　L】011-511-1451
【営業時間】昼　11：30～13：30
　　夜　17：00～21：30
【定　休　日】火曜日

今回の門徒のおしごとは、南17条線沿いにあるマンションや一軒家が立ち並ぶ閑静な住宅街の中にあるお鮨屋さんをご紹介する。

そのお店の名前は「帆掛鮨（ほかけずし）」。東京の東神田で今も続く老舗「帆掛鮨」からのれん分けされたお店で、赤平出身の先代大将、工藤俊一さんが、生まれ故郷の北海道で江戸前鮨を広めようと決心し、東京で修業したのちに南17条でお店を開いた。北海道のお鮨は素材も良く美味しいけれども、「活きを殺してうま味を出すのが江戸前鮨の仕事」というように、一手間二手間かけた江戸前鮨というものを北海道の人にも食べてほしいという願いの元、この店を開いたそうだ。

今年の7月11日で45周年を迎えた「帆掛鮨」だが、先代の工藤さんは今年の3月に命終し、今は弟子の相沢一也さんが大将として腕を振るっている。札幌の地で一手間二手間かけた美味しい江戸前鮨や、江戸前と対を成すように、北前鮨として北海道の素材を生かしたお鮨を提供している。







ひがほんっ子だより

大谷第二幼稚園

「実りの秋、収穫の秋」

秋と言えば「スポーツの秋」「芸術の秋」等様々な「秋」がありますが、現在、本園では「収穫の秋！」。なかよし畑で育てたトマト、キュウリ、ナス、ピーマン等、いろいろな種類の野菜を毎日のように収穫して味わっています。今年は、スイカが大豊作で、夏の間も何度もスイカ割りを楽しむことができました。

近年、幼稚園や保育園に於いても「食育」という言葉が盛んに聞かれるようになりました。「食育」とは、食に関する知識や体験を通じて、健康的な食生活を実践できる力を育むことです。食べることは生涯にわたって続く人間の基本的な営みであるため、子どもだけでなく大人になってからも重要です。そのため、本園の「食育」活動では、きれいで立派な作物を作れるようになることや、収穫できること、見栄えがよくて美味しい料理が作れるようになることが目的ではありません。食自体を楽しいものと感じ、食材がどのようなものかを知り、直接触れてもらいたいと思っています。

ピザ作りや、サケ捌きなどのように、特別な一日もありますが、本園の「食育」活動は、イベントではなく日常毎として、子どもたちの普段の生活や遊びの中にこそありたいと願い、畑仕事に勤しんできました。すると、大人の畑仕事に興味を示し、「手伝いたい」と申し出てくれる子どもたちもいました。

食べるということは、私たちの“いのち”に直結している大切な営みです。世界に目を向けると、それが決して当たり前ではないことに気付かされます。私たちが“食べる”を当たり前にできていることに感謝をし「いただきます」「ごちそうさま」を言わなくては・・・と思いながら、今日も子どもたちと給食をいただいています。

札幌大谷第二幼稚園
園長　中里　泰子

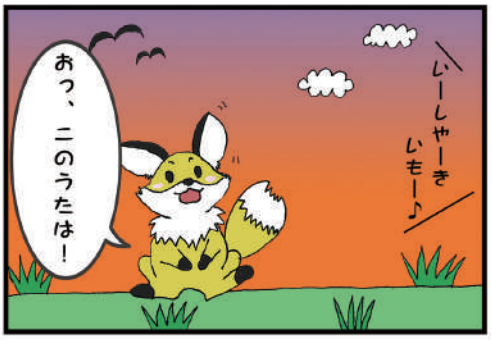





がしわちゃんのゆる〜い日常

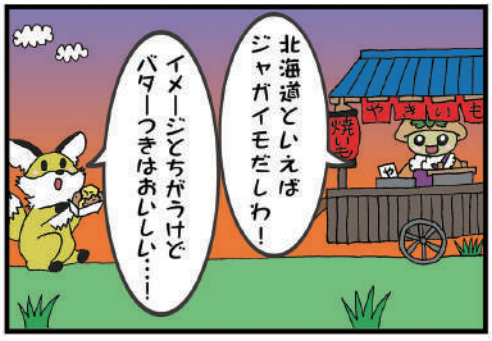
第 12 話

石焼きいも









法話

淤泥華に思う

講題の「淤泥華（おでいけ）」とは、泥を土壌として咲く蓮の華を指します。これは汚泥の華ではありません。泥田に於いて咲く華です。泥田は人間の煩悩を象徴します。煩悩を生きる身でありながら、真実に生きる身に転ぜられるのです。

それは私の力ではありません。煩悩に苦しみ悩む衆生の身を慈しみ悲しむ仏の大悲心の働きです。だから煩悩を生きる身であればこそ、仏の大悲心に働かれるということになります。

むしろ煩悩を生きる身でなければ、仏の大悲心に働かれることもないのです。蓮の華を咲かせる泥田のように、煩悩が大きな意味を持つことになります。これが仏法不思議の最たる出来事です。まさに「煩悩を断ぜずして涅槃を得る」ということになります。

だから、この「淤泥華」の譬えは仏様の眼に映る人間の姿です。一人ひとりが泥の中で大切なものを見失って生きている、煩悩具足の苦悩する衆生であると言い当てられているわけです。だからこそ、阿弥陀様は如（真実そのもの）から立ち上がり、自らその苦悩する衆生に働きかけ、南無阿弥陀仏と自ら名乗り、苦悩する衆生の中に淤泥華の華を咲かせようと願われているのであります。

あなたはあなたらしく生きる事ができる、そのあなたの命に目覚めなさいと呼びかけて、こちらに来ておられるのです。戦争・差別・憎しみ・怒り・腹立ち・妬みに溢れたこの五濁悪世と言われる、我々の世界の只中に、仏様は私たちにひたすら「いのちに還れ」と呼びかけて下さっているのであります。

―人間回復の原理―

私には7歳離れた姉がいました。姉は小児性リウマチという難病を患っており、歩く事もままならず寝たきりで、ベッド上での生活を余儀なくされていました。そうした事情を何もわからない私は、当時10歳でありましたが、その様な難病の姉に向かって「歩かんか！」と心ない言葉を投げかける日々を送っていました。

そんな中、1959年、伊勢湾台風がやってきました。激しい風雨で、我が家も床上浸水し、家族全員で避難しなければなりませんでした。しかしその避難の最中、姉が洪水に巻き込まれて水に溺れ、危篤となってしまいました。台風が来て三日後、17歳の姉は最後に病床で私達家族に向けて「仏様がお迎えに来たから、自分はもう帰らなければなりません。自分がもう少し生きる事が出来たなら、尼さんになって仏教を勉強したかった。自分はもう勉強できないけど、自分の「きょうだい」で仏教を勉強する人がこれから生まれたら、

本当にうれしい」と言い残し、息を引き取りました。この事が、私が仏教を勉強するきっかけとなりました。私はそれまで仏教は死んだ後の事であって生きている自分には関係ないと思っていましたが、「仏教は私に生きるとは何か、生きる事の本当の意味を教えてくれるかもしれない」と直感的に思い、池田勇諦（ゆうたい）先生に教えられて同朋大学に入りました。

仏教を勉強する中で、パーリ語の法句経を翻訳された中村元（はじめ）先生の「ダンマパダ」という本に出遇いました。その本には「己が身にひきくらべて殺す事なかれ、殺さしむる事なかれ」という言葉がありました。私はこれが仏教の原点の一つであると思いました。自分は人に殺されたくない。命を長らえたいと、誰もがそう願うでしょう。だからそれを自分の身に引き替えて、他人を殺してはならない。また、それを他人に仕向けて殺させてもならないという事です。

仏教は基本的に「不殺」です。ですから個人の殺人も、戦争という名の集団の殺人も、死刑という国家の殺人も、否定される事です。これは「ダンマパダ」という原始仏教から引き出される教えだけではなく、私はその原点は阿弥陀仏の本願にあると思います。その阿弥陀仏の本願を根拠にすれば、お釈迦さまの「不殺」の態度も明確になります。

浄土真宗的思惟というものがあるとすれば、私たちの出来事の一切を本願に帰して学んでいくことだと思っています。政治も経済も社会も、一切の問題を本願から見直してみるという態度です。

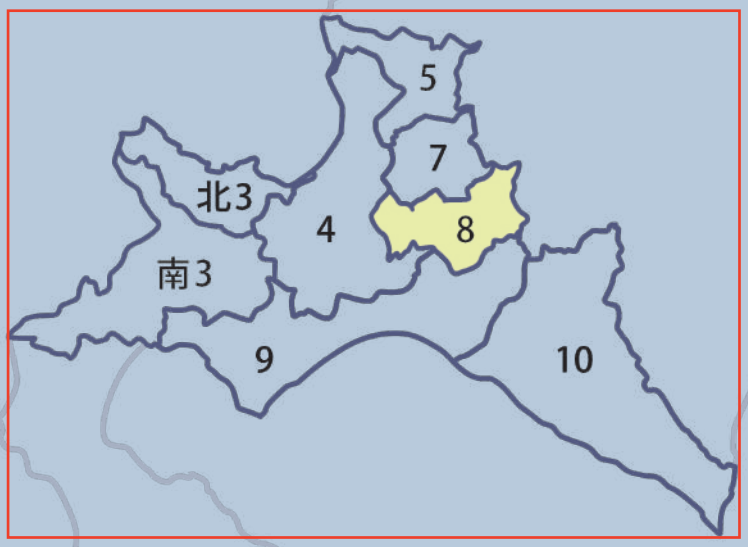
―濁世の只中に念仏あり―

真宗の経典、浄土三部経の中に阿弥陀経があります。そこに「五濁」と「阿耨多羅三藐三菩提」という言葉が出てきます。和田稠（しげし）先生はこの五濁の中の「命濁」とは「いのちが輝かないことだ」と教えてくださっています。阿耨多羅三藐三菩提とは、この五濁の世界の只中でお釈迦様は阿弥陀の法を説かれたわけです。その阿弥陀仏の法こそが本願の念仏です。その本願の念仏は五濁に響く阿弥陀仏の呼びかけです。

しかしこの五濁の世界は、最初からただそこにあったわけではなく、私達人間が作り出した宿業そのものです。だからその責任は私達一人ひとりにあります。仏様の本願に目覚め、五濁を作る我が身を忘れずに、その身に働く阿弥陀仏の大悲の心を南無阿弥陀仏といただいて、念仏申しましょう。



尾畑　文正（おばた　ぶんしょう）
元同朋大学学長
本稿は２０２６年７月の暁天講座の法話要旨です。



無盡蔵

崇敬区だより

「み光のもと　われ今さいわいに
この浄き食をうく　いただきます」



コロナ禍以降、当寺で聞こえてくることがなくなった食前のことばである。当寺で法要や法話会、その他の集まりなどがあると必ずお斎がセットになっていた。私の記憶がある平成以降でも春の彼岸にはこしあんの牡丹餅、報恩講には真っ黒なお煮しめと大きなおにぎり、秋の彼岸にはつぶあんのおはぎを。また毎月の定例法話の日には味の濃い炊き込みご飯とお味噌汁、もちよった漬物をお寺の婦人会の会員の皆様が中心となって用意していただいていた。

おはぎや牡丹餅をつくるときに「炊いたお米を半殺しにするんだよ」といわれよくわからず困惑したこと、素手で炊き込みご飯やお煮しめを混ぜて熱くないかと聞くと、「熱いけど慣れたし、ばあちゃんの出汁が出るからおいしんだよ」と笑って話していただいたこと。時代が進むにつれ薄味になり、お煮しめのそれぞれの数をそろえたり、衛生の観点からも手袋やマスクをして調理するようになったりしたこと。どのメニューを思い返してもさまざまなことが思い起こされる。コロナ禍が収束してきた現在お斎を再開しようとしたが、一度やめてしまったものを再開するのは難しく、お彼岸や報恩講の際もお斎がないのは私自身なにか喪失感や寂寥感を抱いている。

ご門徒さんからご法事を頼まれる際も、「お経だけで」や「家族だけなので食事はしませんので」など、膳をともにする機会がすっかりなくなってきている。昔のように法要があるたびに宴会になるのがいいというわけではないが、共に念仏し膳をかこみ、なきひとをご縁として今、生かさせていただいている実感を抱いていく機会を少しでも共有していきたい。



第8組
光明寺　達　昌哉

生涯一聞法者
池田（いけだ） 勇諦（ゆうたい）

池田勇諦は昭和から令和にかけて活躍した真宗僧侶であり、真宗教育者である。後述する出生や、自坊の成り立ちを起因とし、門徒第一の「現場人」として生涯を生き抜いた人物である。また、この年代の人物としては珍しく、影響を受けた先生はあれど、特定の師を持たず「我以外皆我師」の姿勢で聞法生活を大切にした人物である。



池田 勇諦（本山より提供）

仏縁をひらく

昭和 9 年、三重県桑名市の熱心な真宗門徒の家に生まれた勇諦は、数え 5 歳の頃から聞法生活を始めた。きっかけは桑名別院での聞法を日課としていた祖母「いよ」が視力を失っていた為、勇諦が別院まで手を引いて行ったという事にはじまる。

後生の一大事

聞法を重ねていく中で、暁烏敏の法話に感化され、祖母からは「あんたも死ぬんだよ」と言われたことで恐怖にかられる。「後生の一大事の解決は、僧侶になるほかなし」と思い至り、昭和 15 年、満 6 歳で大谷派僧侶となり、勇諦の法名を授かった。

布教師として

僧侶となった勇諦は 10 才を過ぎた頃から法話に出る程になっていた。学生時代には夏休みなどを利用し、各地の道場へ布教師として赴き、現場での研鑽を深めた。ある時には福井県九頭竜川沿いの道場を歩き、「七十席」の法話を任せられる。勇諦の法話に魅かれ、次の道場にもお参りし、中には全座に参る人もいた程だという。

教学する道

昭和 27 年、名古屋の東海同朋大学に入学した勇諦は、当時学長であった安田力と出会い、「これからもお説教を本当に自分の一生の道とする決意があるなら教学をしっかりやりなさい。それが無ければ続かんぞ」と指南され、卒業後は大谷大学の大学院へ進み、「母校に少しご奉仕してほしい」と勧めがあり、以来 39 年の長きに渡り、同朋大学において専任教員として奉職した。（専任、用任教授、学長も歴任）

「真宗大谷派西恩寺」

勇諦が住職を務めた西恩寺は、父喜一の並々ならぬ志願から建立された聞法道場である。勇諦の得度を機に、昭和 22 年、自宅を私設「八幡説教場」として開放し、昭和 30 年に承認認可を得て「真宗大谷派西恩寺」として出発を遂げたのである。教学者・布教師として名高い勇諦であるが、どこまでも西恩寺門徒と共に、如来・聖人の弟子として、仏縁を賜った祖父母や父を憶念し、その人生を全うした。

池田 勇諦（1934〜2025）

三重県桑名市に生まれる
真宗大谷派の僧侶、前住職
元大谷大学学長、同朋大学名誉教授
真宗大谷派「講師」

著 / 教区駐在教導・宇都宮 力

すすきの探訪ツアー

冬紅葉が路面を彩る季節となった。薄野の外れを流れる鴨々川の畔では、銀杏の実が無造作に転がっている。この街路樹も、大正七年に中島公園で開かれた開道五十周年記念博覧会の際に植樹されたものなのだろうか。橙色の丸い姿は、なかなか愛らしい。とはいえ、その可愛らしさに油断は禁物だ。うっかり踏んだが最後である。薄皮の中に潜む果肉の、あの独特の臭い。靴底に付着すれば、その後の道行きは気が重い。まして指にでも付こうものなら大変だ。洗っても洗っても、鼻だけはごまかせない。



▲秋の散歩道 銀杏並木

眩く輝く路傍の樹に目を奪われると、つい口にしたくなる一節がある。

「札幌は秋風の国なり、木立の市なり。おほらかにして人の香よりは樹の香こそ勝りたれ。..... 詩人の住むべき都会なり。」

明治四十年、わずか二週間ほど北門新報の記者として札幌に在籍した石川啄木の「秋風記」の一節である。釧路新聞へ転じるため札幌を旅立った啄木を、釧路で出迎えたのが町長と代議士・木下成太郎だった。

米町の芸妓と浮名を流した啄木だが、七十六日後に静かに北海道を去り、その後『一握の砂』にこんな歌を残している。

「伴なりしかの代議士の　口あける青き寝顔を　かなしと思いき」

「かの代議士」とは、木下のことだろうか。ふと見せた無防備な寝顔に、人生の陰影を感じ、啄木は「かなし」と思ったのかもしれない。華やかな政治家の顔ではない。そこに、ひとりの人間の姿を見たのだろう。

北国で出会った人々や景色、街の喧騒。短くも濃密に過ごした日々は、若き詩人の記憶に刻まれたことだろう。銀杏は秋の風情を残して実を落とす。啄木もまた、この地に短い足跡を残し、幾つもの言葉を実らせた。そう思えば、足元の銀杏も少し違って見えてくる。



▲一握の砂 秋のお薦め本



▲木下成太郎像



著 / 民衆史研究家　石川圭子

ダキシメルオモイ
～オモイと願いの河～



▶2009年、長男の夜泣きや子育てに苦心する中で描いた作品が「ダキシメルオモイ」の原点です。長男の子育てを通じ、親から子へ世代を超えて受け継がれる想いに気付き、このテーマに向き合うきっかけとなりました。



▲次男と妻を描いた「ダキシメルオモイ」は、互いのおでこを合わせて想いを共有する姿を描いた作品です。東日本大震災翌月に生まれた次男を通じ、「この子を何があっても守り抜く」という親の強い覚悟が込められています。

ダキシメルオモイは、それぞれの家族に流れる「オモイと願いの河」を感じながら、ひと家族、ひと家族の絵を描いています。

ほとんど初対面の家族から、何世代にもわたって受け継がれてきたオモイを、どのように感じるのか。その入り口が「名前」です。

名前は、子どもへの最初の贈り物。そこには名付け親のオモイと願いが込められています。なぜその字を選び、その響きを選んだのか。その名前には、名付け親がそこに至るまでに生きてきた半生が凝縮されているように思います。

取材では、子どもの名前の由来から、ご両親、祖父母、曾祖父母へと、分かるところまで名前をたどり、どんな人だったのかを聞いていきます。500 家族ほどに出会う中で、一人ひとりの名前と人生をたどっていくと、その家に何代にもわたって流れてきた、大きな河のようなものが見えてくることに気づきました。

結婚とは、それぞれ違う河で育った二人が出会うことでもあります。流れも、大切にしてきたものも違う。その違いに戸惑いながら新しい家族をつくり、子どもは両方の家から流れてきたオモイと願いを受けて育っていきます。

自分の名前に込められた願いに耳を傾け、自分より前に生きた人たちを知る。

河に逆らい、生きにくさを感じることもあれば、その流れに助けられることもあるでしょう。

河は、私たちを縛るものではありません。

自分がどこから流れてきたのかを知り、受け継いだものの中から何を大切にし、何を次の世代へ渡していくのか。

「オモイと願いの河」を知ることは、自分がどこから来て、これからどこへ向かって生きていくのかを考えることでもあるのだと、私は感じています。



著 / 小林憲明



年間行事表　11～１月

11月		12月		1月	
1日（日）	山鼻支院婦人会定例 13：00～ 金﨑恵明（むかわ町　本念寺）	1日（火）	山鼻支院婦人会定例 13：00～ 伊藤智秀（札幌市　明徳寺）	1日（金）	修正会 0：00～　本堂 坂田智亮（札幌別院輪番）
2日（月）	札幌婦人会定例法座 13：00～　研修室 中岡　秀（深川市　敬徳寺） 豊白支院婦人会定例 13：00～ 金﨑恵明（むかわ町　本念寺）	2日（水）	札幌婦人会定例（報恩講）法座 10：00～　大谷ホール 坂田智亮（札幌別院輪番） 豊白支院婦人会定例 13：00～ 伊藤智秀（札幌市　明徳寺）		月忌休日 1日～6日迄 葬儀は対応致します
3日（火）	現来寺支院婦人会定例　同上	3日（木）	現来寺支院婦人会定例　同上		
4日（水）	北三条支院婦人会定例　同上	4日（金）	北三条支院婦人会定例　同上		
5日（木）	円山支院婦人会定例　同上	5日（土）	円山支院婦人会定例　同上		
6日（金）	北支院婦人会定例　同上	6日（日）	北支院婦人会定例　同上		
8日（日）	ひがほん暮らしの朝市 10:00～14：00　大谷ホール 開基現如上人御命日法要 13：30～　本堂 渡辺晃仁（別院職員）	8日（火）	ひがほん暮らしの朝市 10:00～14：00　大谷ホール 開基現如上人御命日法要 13：30～　本堂 道房潤（別院職員）	8日（金）	ひがほん暮らしの朝市 10:00～14：00　大谷ホール 開基現如上人御命日法要 13：30～　本堂 牧野欣胤（別院職員）
12日(木)	大谷婦人会定例法座 13：00～　本堂 酒井　智（南富良野町　惠光寺）	12日(土)	大谷婦人会定例法座 13：00～　本堂 白山靖久（石狩市　生振寺）	12日(火)	大谷婦人会定例（新年会）法座 13：00～　本堂 坂田智亮（札幌別院輪番）
				16日(土)	親鸞講座 15：00～　大谷ホール 小泉元瑞（江別市　瑞雲寺）
		19日(土)	親鸞講座 15：00～　大谷ホール 小泉元瑞（江別市　瑞雲寺）		
21日(土)	親鸞講座 15：00～　大谷ホール 小泉元瑞（江別市　瑞雲寺）				
22日(日)	ひがほん暮らしの朝市 10:00～14：00　大谷ホール				
				24日(日)	ひがほん暮らしの朝市 10:00～14：00　大谷ホール
27日(金)	宗祖親鸞聖人御正忌 13：30～　本堂 吉田法純（恵庭市　島松寺） 祖徳讃仰の集い 16：00～　大谷ホール 福本ゆめ 二胡のひととき「小春日和」	27日(日)	ひがほん暮らしの朝市 10:00～14：00　大谷ホール 宗祖親鸞聖人御命日法要 13：30～　本堂 金石潤導（黒松内町　開正寺） 年末に付き、御命日法要は 27日のみとさせて頂きます	27日(水)	宗祖親鸞聖人御命日法要 13：30～　本堂 佐々木強（札幌市　栄光寺）
28日(土)	宗祖親鸞聖人御正忌 13：30～　本堂 金石晃陽（蘭越町　光福寺）			28日(木)	宗祖親鸞聖人御命日法要 13：30～　本堂 同上
29日(日)	仏教講座「暮らしの中の仏教」朗読劇 『王舎城の悲劇～死といのちの物語～』 14：00～　大谷ホール 朗読 中西志香（中札内村　同朋寺） 上宮範子（札幌別院門徒） 寺田沙世（札幌市　浄見寺） 佐々木強（札幌市　栄光寺）				
		31日(木)	除夜の鐘・初鐘 23：30～　鐘楼堂		

おあさじ

朝６時30分から
毎日どなたでも
お参りいただけます

祖徳讃仰のつどい「親鸞聖人御正忌」

親鸞聖人御正忌
○日　時　11月27日(金)・28日(土)
　　13:30～
○場　所　本堂
○御法話　吉田法純
　　(恵庭市 島松寺)

二胡のひととき「小春日和」
▶日　時　11月27日(金)
　　16時開演(法要後)
▶場　所　大谷ホール
▶出　演　福本 ゆめ
▶入場料　無料

永代経・寄贈披露

尊い浄財及び寄贈を賜りました。
ここに披露申し上げます。

○永代経

【本院】
西村　善雄 様 中央区
守谷　友成 様 豊平区

【円山支院】
吉田　節子 様 中央区
築地由紀子 様 中央区

【山鼻支院】
百井　悦子 様 中央区

【北支院】
日詰　裔子 様 豊平区
佐藤　貴子 様 北広島市
中村　吉孝 様 東区
佐藤　満 様 東区
平出幾美子 様 東区
高井　俊哉 様 東区
塚田　奈央 様 東区
佐藤　浩子 様 埼玉県

初鐘・修正会

【初鐘】
日　時：12月31日(木) 23:30～
場　所：鐘楼堂

【修正会】1月1日(金) 0:00～
本堂
坂田智亮輪番

団体参拝

お参りいただきありがとうございました。

９月１１日　岡崎別院　様
１０月２３日　札幌大谷幼稚園　様
　札幌大谷第二幼稚園　様
　大谷オアシス保育園
１０月２６日　北海道教区　第５組　様
　第８組　様
１０月２７日　北海道教区　南第３組　様
１０月２８日　北海道教区
　第７組　廣隆寺　様
　専行寺　様
　法輪寺　様
　第８組　本行寺婦人会　様
　第１０組　浄運寺　様

テレホン法話

(011)511-1313

11月　自己を見つめる　白山　順祐
12月　今、この時　玉井　覚昭

『つきあかり 東別院テレホン法話集』より

無量寿の会

札幌別院にて毎月２回13時から
お寺で俳句を詠んでいます
講師 荒舩青嶺先生に教わります

札幌別院機関紙　令和８年11月掲載句

水澄むや進水式の大漁旗　鳴兎正吉
水澄むや己の影の逃げきれず　目加田懋
カラフルな公園遊具落ち葉降る　西田美智子
水澄みてほつちやれおもむれに沈む　増田植歌
大寺の公孫樹落葉の饒舌さ　置田正子



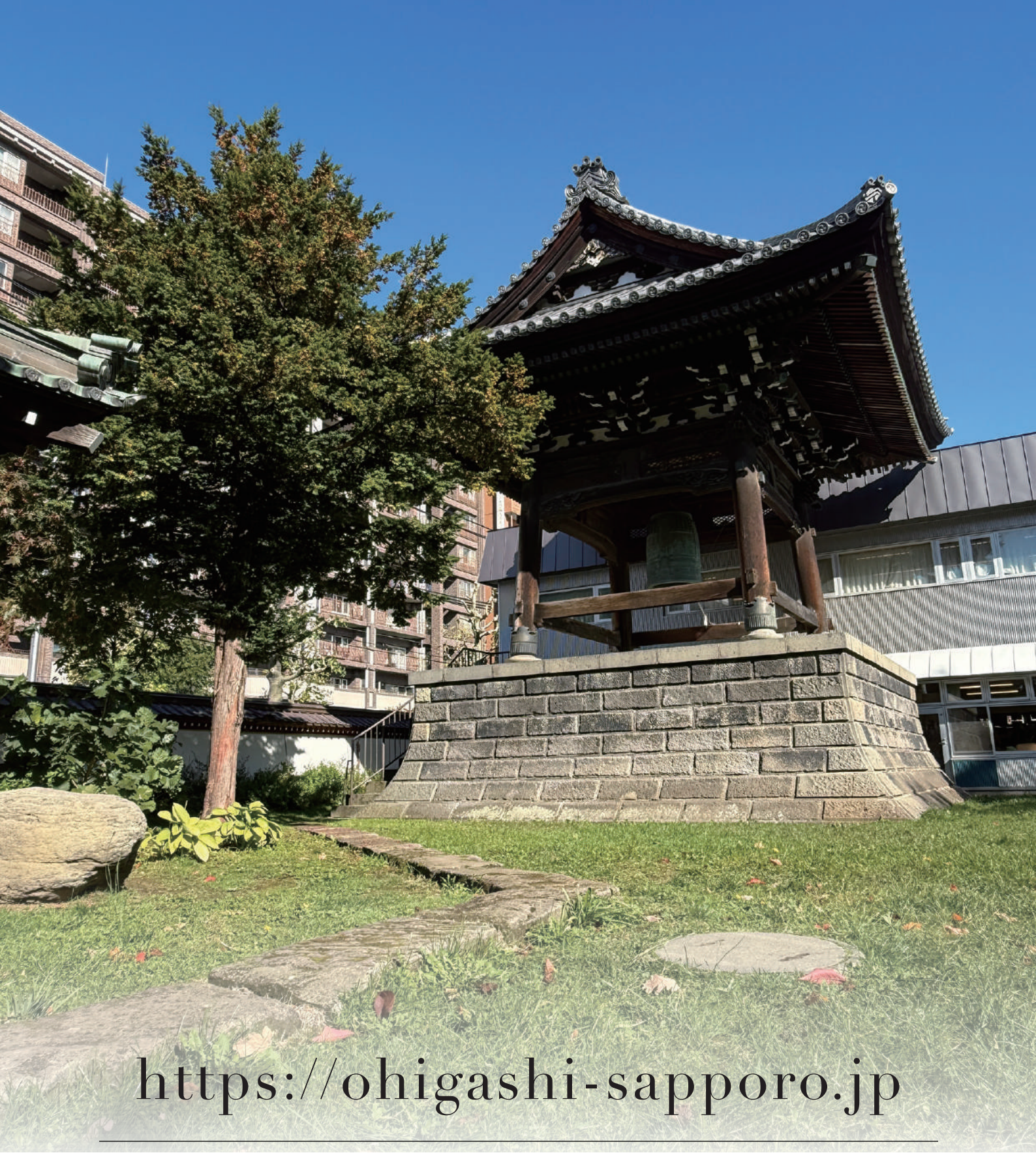
表紙紹介

Title Photo　駆け足の秋(洞爺湖)
菊池 恵子

編集後記

この記事を書いているのは秋分の日の直前である。秋のお彼岸法要を目前に控え、お内陣を荘厳し、玄関に幕を張り、内外の掃除をして参詣を迎える準備に勤しんでいる。外に出ると秋の澄んだ空気と空高く浮かぶ雲。そして境内から近所の庭に咲くシュウメイギクとコスモスを眺め、あの厳しい寒さの冬を前に、自然界の心地よい季節を楽しませてくれている。時間はちょうど夕暮れ時。朝から明るく照らしてくれている太陽がまさに西に沈もうとしている。お寺から見れば手稲山の方角になる。『仏説観無量寿経』の中にお釈迦様が韋提希に浄土を観ずる法として「日想観」が説かれているが、日の没する彼方に西方極楽浄土があると教えている。これはすべての生きとし生けるものが還る世界であると伝えていよう。きれいな夕日を眺めながら、一日の終わりに哀愁を感じ、この心地よい季節に仏法を聴聞して西方極楽浄土に思いを寄せようと思うことである。

(舘)



https://ohigashi-sapporo.jp

東本願寺 札幌別院

〒064-0807 札幌市中央区南７条西８丁目 290
TEL.011-511-0502
E-mail. ohigashi@abeam.ocn.ne.jp

地下鉄南北線「すすきの」駅で下車
→市電外回り「東本願寺前」徒歩１分

WEBは▶
こちらから

LINEスタンプ

さっぽろ東本願寺　2026 11月号No.249
（発行人）真宗大谷派札幌別院
（代表者）坂田智亮